

平成5年度国立大学・学部附属学校等教官 海外教育事情視察派遣（B団）に参加して

～訪問国（ドイツ・フランス・アメリカ）の概況と学校訪問～

平野謙治

I. はじめに

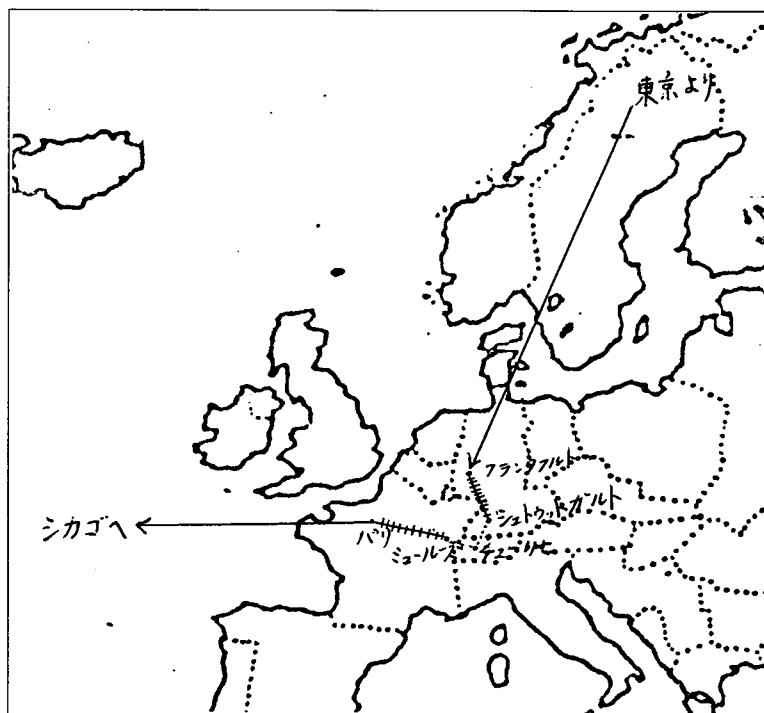
今回、この海外研修に参加させて頂いたことは、英語教師として、語学研修の願ってもないよい機会であった。

当初から渉外係（通訳）を希望していたので、夏休み、キャロル先生にアメリカの教育事情について8時間（4回）ほどの講義を受けて臨んだ。その他、先生には、調査項目の英訳を見ていただいたりして、いろいろお世話になった。アメリカの教育について、事前に基礎知識を得ることができ、向こうへ行ってからも大変役に立ったように思う。また、日頃生徒たちに「日本語しか知らない人と、外国語を知っている人では、物の見方、考え方が大きく違ってくる。客観的にものを見て初めて、物事の真実がわかる。」と話しているのだが、この研修に参加して、益々この感を強くした。つまり、永年日本にいながら、実は日本のことがわかっていないことが多かったり、日本の教育制度の問題点も、他の国と比較して初めて気がつくこともある。様々な外国の文化、教育事情を視察することによって、改めて日本の文化や教育を再認識したように思う。新しい教育の目標にもあるように、国際理解を深めるためには、まず自国の文化等を知り、それを発信していったり、同時に外国のことについてもよく知る必要がある。参加した団員のほとんどの先生方が「言葉（英語）が話せたらもっと良かったのに・・・」と話しておられ、英語教育の重要性を改めて実感し、身が引きしめる思いであった。

II. 行程及び日程

今回の派遣団は、11月5日から11月29日までの25日間、主要訪問国ドイツ、フランス、アメリカの3ヶ国を研修するのがねらいであり、行程及び日程は下記のとおりに行われた。学校訪問はドイツで9校、フランスで4校、アメリカで4校、全部あわせると17の学校におよんだ。校種も、幼稚園、小学校、中学校、高校、養護学校、デイケアセンター、そして、フランスではフランス語が話せない子どもたちのための学校とたくさん訪問することができた。パリからシカゴへ向かう時、アメリカン航空がストのため、急ぎょデルタ航空でシンシナティまで行き、そこからシカゴへ向かうというハプニングもあったが、全員無事、予定通り研修を終え、11月29日の午後、成田空港に到着した。

図1. 視察コース



Ⅲ. 各国教育事情視察報告

1. ドイツ

11月5日午前11時、成田全日空ホテルを出発し、成田空港へと向かう。空港内で昼食をとった後、14時35分フルトハンザ航空711便にてフランクフルトへと飛び立った。約12時間の旅である。到着したのは現地時間18時18分

(日本時間午前2時18分)であった。気温4℃と日本と比べるとやや寒い感じがした。時差ボケを解消するためだろうか、フランクフルトで、2日間の教育文化施設視察の日程が組まれており、ゲーテの家、ハイデルベルク城等を訪ね、その後列車で学校訪問地シュトゥットガルトへと向かう。列車内はきわめて快適で、座席前の大きなテーブルやコートを掛けておくロッカーもあった。

(1) シュトゥットガルトの概要

旧西ドイツ南部、バーデン州とビュルテンベルク州が合併してできたバーデンビュルテンベルク州の州都で、ネッカー川の左岸に位置している。

人口は57万人、ベンツ、ポルシェの町、また1993年に世界陸上が開かれた町としても有名である。近年、急速に発展してきた商工業の中心地であり、鉄道交通の要衝でもある。市街は森林と果樹園、ブドウ園に囲まれた美しい盆地の丘陵にあり、1746年～1807年建設の新宮殿など古い建物が残るが、中心市街には近代的な高層ビルが建ち並んでいる。この町には外国人が多く、4人に1人が外国人で、その中でもユーゴスラビア人が最も多い。

(2) 学校教育制度

ドイツは、16の州より構成される連邦制の国家である。各州は、国の教育制度に関する基本的権限を有しており、そのために各州に文部省が設置されている。州文部省の下に、中間段階として県学務部が、さらにその下に群学務部が置かれており、基礎学校、中学校、高等学校等を所管している。

義務教育年限は、満6才～満15才

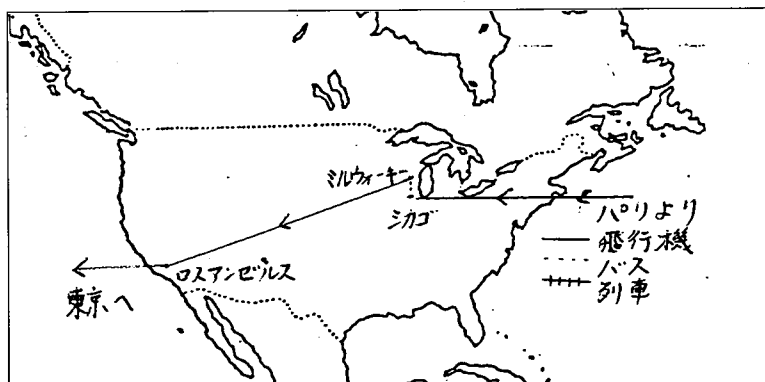
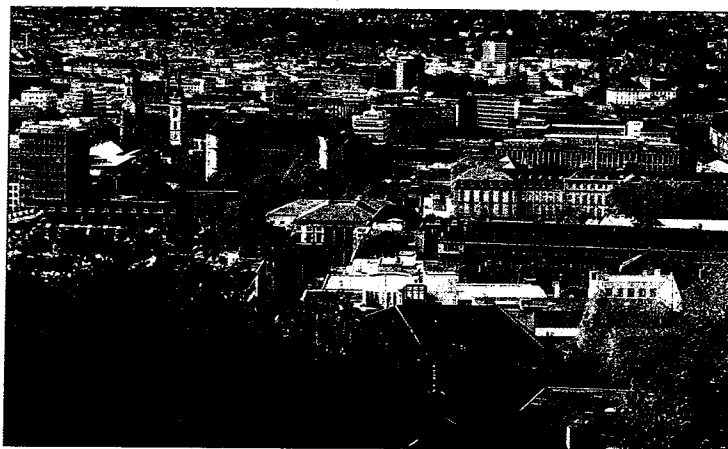


図2. 日 程

| 日数 | 月日 | 曜日 | 都 市 名 | 現地時間 | 予 定 (交通機関) | 宿 泊 地 |
|----|--------|----|-------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|-----------|
| 1 | 11月5日 | 金 | 東京(成田)発 フランクフルト着 | 14:05 18:15 | (LH 711) | フランクフルト |
| 2 | 11月6日 | 土 | フランクフルト(ドイツ) | | 教育文化施設等視察 | フランクフルト |
| 3 | 11月7日 | 日 | フランクフルト | | グループ視察 | フランクフルト |
| 4 | 11月8日 | 月 | フランクフルト発 シュトゥットガルト着 | 10:46 12:08 | 移動・事前研修 (列車 218km) | シュトゥットガルト |
| 5 | 11月9日 | 火 | シュトゥットガルト(ドイツ) | | 学校訪問 | シュトゥットガルト |
| 6 | 11月10日 | 水 | シュトゥットガルト | | 学校訪問 | シュトゥットガルト |
| 7 | 11月11日 | 木 | シュトゥットガルト発 チューリッヒ(スイス)着 | 10:30 13:30 | 移動・事前研修 (バス 約195km) | チューリッヒ |
| 8 | 11月12日 | 金 | チューリッヒ | | 教育文化施設等視察 | チューリッヒ |
| 9 | 11月13日 | 土 | チューリッヒ | | グループ視察 | チューリッヒ |
| 10 | 11月14日 | 日 | チューリッヒ発 ミュールーズ着 | 10:00 12:00 | 移動・事前研修 (バス 約120km) | ミュールーズ |
| 11 | 11月15日 | 月 | ミュールーズ(フランス) | | 学校訪問 | ミュールーズ |
| 12 | 11月16日 | 火 | ミュールーズ | | 学校訪問 | ミュールーズ |
| 13 | 11月17日 | 水 | ミュールーズ発 パリ(フランス)着 | 08:37 12:59 | 移動・事前研修 (列車 492km) | パリ |
| 14 | 11月18日 | 木 | パリ | | 教育文化施設等視察 | パリ |
| 15 | 11月19日 | 金 | パリ発 シカゴ着(シンシナティ-経由) | 13:30 09:00 | 移動 (DL 43) | シカゴ |
| 16 | 11月20日 | 土 | シカゴ (アメリカ合衆国・イリノイ) | | 教育文化施設等施設 | シカゴ |
| 17 | 11月21日 | 日 | シカゴ | | グループ視察 | シカゴ |
| 18 | 11月22日 | 月 | シカゴ発 ミルウォーキー着 | 11:00 13:00 | 移動・事前研修 (バス 約135km) | ミルウォーキー |
| 19 | 11月23日 | 火 | ミルウォーキー(アメリカ合衆国・ウイスコンシン州) | | 学校訪問 | ミルウォーキー |
| 20 | 11月24日 | 水 | ミルウォーキー | | 学校訪問 | ミルウォーキー |
| 21 | 11月25日 | 木 | ミルウォーキー | | 事後研修 | ミルウォーキー |
| 22 | 11月26日 | 金 | ミルウォーキー発 シカゴ着 シカゴ発 ロサンゼルス着 | 10:30 12:30 13:30 15:51 | 移動 (バス 約135km) (AA 1891) | ロサンゼルス |
| 23 | 11月27日 | 土 | ロサンゼルス(アメリカ合衆国・カリフォルニア州) | | 教育文化施設等施設 | ロサンゼルス |
| 24 | 11月28日 | 日 | ロサンゼルス発 | 11:40 | (UA 897) | 機 中 |
| 25 | 11月29日 | 月 | 東京(成田)着 | 16:30 | | |

LH: ルフトハンザ・ドイツ航空 AA: アメリカン航空 UA: ユナイテッド航空 DL: デルタ航空

までの9年間であるが、この義務教育終了後いかなる全日制の学校にも就学しない者は、最低3年間（18才まで）定時制の職業学校に就学しなければならない。（職業教育義務）従って、実質は18才までの12年間ということになる。学年度は、8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わるが、実際に学校が始まるのは9月からである。日本の小学校に当たる基礎学校（Grundschule）の修業年限は4年である。4年生



シュトゥットガルト

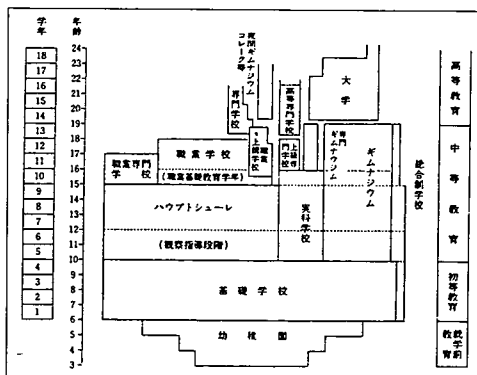
（10才）を終わった段階で、生徒たちは、通常、基礎学校の作成する内申書や親の意見、試験の結果などに基づき、中学校（Hauptschule）、実科学校（Realschule）、高等学校（Gymnasium）のいずれかの中等学校に進学する。4年を終わった段階で進路を決定するのは少し早いのではないか、という我々の質問に対して、いろいろ調査をしてみたが、10才で決定するのも12才で決定するのもそう変わりはない。進路決定の信頼性は80%、インテリテストも含めると85%であるということであった。最近ではギムナジウムへの進学希望する生徒が多くなり、学校の進路指導と意見が合わない場合は、学校でテストを行い、良かったらギムナジウムへ行けるが、悪かったら、さらに中央で行われるテストを受けることができる。中央でのテストの合格率は70%だそう。それぞれの中高等学校へ進学しても、5年、6年の2年間は「観察、指導段階」で進路変更が可能である。しかし、ハウプトシューレからギムナジウムへ移る生徒はほとんどなく、リアルシューレからギムナジウムへはわずかにいるが、かなり難しいらしい。

① 中学校（Hauptschule）

中学校は、いわゆる公立の普通の学校で、第5学年から第9学年までの5年制の中等学校である。市の教育局長であるエリンガー氏によれば、ハウプトシューレには問題が多く、目標を失った生徒が多いということだった。

第9学年を終了すると「中学校修了証」が授与される。修了者は、通常、見習い工として就職し、職場で職業訓練を受ける傍ら、最低3年間（18才まで）定時制の職業学校に就学する。約50%のハウプトシューレが基礎学校（グルントシューレ）と同じ敷地に位置している。

図3. ドイツ学校系統図



② 実科学校（Realschule）

実科学校は、いわゆる職業学校で、第5学年から第10学年までの6年制の中等学校である。実科学校の修了者には、「中級修了証」が授与されるが、これは主として上級専門学校への入学資格となる。卒業者は上級専門学校または職業学校へ進み、将来は中級技術者、公務員、中間管理職への道が開かれている。エリンガー氏によれば、リアルシューレは特に問題がなく、ほとんどの生徒が学校生活にうまく適応しているとのことだった。

③ 高等学校（Gymnasium）

高等学校は、成績優秀者が行く、第5学年から第13学年までの9年制の中等学校である。その修了に当たっては、大学入学資格試験（アビトゥア）が行われ、その合格者は、高等学校修了資格と同時に、大学入学資

格を得ることになる。その意味で、高等学校は、大学進学のための予備教育機関としての性格を有する。

④ 総合制中等学校 (Gesamtschule)

このゲザムトシューレは、上記の3つの学校を統合したような学校で、現在、ベルリン、ハンブルク等少数の都市州で正規の学校として認められている。全国では、約200の学校が実験校として進めている。この学校は、第5学年から第9ないし10学年までの5年ないし6年制の中等学校である。所定の学年を修了すると、中学校修了証 (第9学年)、実科学校修了証 (第10学年) が授与され、さらに第10学年修了者は、高等学校上級学年に進むことができる。

(3) 学校訪問

フリードリッヒ I 世及びウィルヘルム I 世の宮殿であったといわれるバロック様式のスポーツ、文化省で、文部事務次官コーベル氏から、話を聞くことになっていたが、通訳氏が交通渋滞に巻き込まれ、急ぎよ私がやらなければならない、冷や汗をかきながら通訳を行った。その後、エリンガー氏の案内で、まず Robert-Koch-Schule (レアルシューレ) を訪問した。行くとすぐ、5年生の男の子と女の子が別棟の教室へ笑顔で案内してくれたが、「ぼくのお父さんはイタリア出身だ。」「私のお父さんはギリシャ出身だ。」と言うのには驚いた。5年生の英語の授業を見たが、CANを使った句型を楽しそうに学習していた。内容は、日本の中学1年の内容と同じだが、Yes, a little bit. が自然に口から出るなど、5年生でも、かなり話す力はあるように思った。次は、Bodelschwing-Schuleという精神薄弱児の子どもたちの通う養護学校を訪問した。ここには、肢体不自由児の学校も併設されており、私は半数の先生方と、そちらの方へ通訳として回った。ドイツの先生方は、英語を話せる方が多く、ドイツでは結構仕事が多かったように思う。午後からは、ユース・デパートメントのウェーバー氏の案内で、共働きの家庭の生徒を預り指導している、Children Day Care Centerと幼稚園を訪れた。幼稚園は義務教育ではないが、多くの親が子供を幼稚園に通わせており、幼稚園に行かない子供は全体の15%である。最近、離婚の増加により片親の子供が多くなってきているとのことだった。校舎内を回って特に気づいたことは、こちらの学校はどこでもそうだったが、廊下の壁や窓ガラスに紙で作った動物や花がいたるところに貼ってあり、非常にカラフルな感じがした。

学校訪問二日目は、午前中、まずKonigin-Olga-Stift (ギムナジウム) を訪問した。若くて、ハンサムなWeidlich校長に出迎えられ、その後、生徒達が美しいコーラスで歓迎してくれた。私たち3人は、9年生の英語の授業を見た (というより参加した) が、16人程の生徒が椅子だけで円陣を組み、先生とFree Talkingをしていた。私たちも円陣に入り、「日本の生徒は制服を着ていますか。」など、日本についてのいろいろな質問を受けた。いつもこういう形で英語の授業を受けているかとの質問に、そうですとの答が返ってきた。



Bodelschwing - Schuleにて

ドイツ最後の訪問校は、Frieden-schule (ハウプトシューレ) である。この学校は、基礎学校と同じ敷地であり、生徒達はとても人なつこくて、明るい感じがした。基礎学校と中学校の二つのグループに分かれ、私は中学校の方の通訳として参加した。英語の話せるエリンガー氏を介して、3人で行ったが、英語を聞き取ることと日本語で表現することの難しさをしみじみと感じた。授業は、5年生の音楽を見たが、クラシックを鑑賞し、そのイメージにあった絵を何人かが前に持って出て、最後にひとつの大きな絵を完成させていた。音楽室とは思えないぐらい、楽器その他の設備はほとんどなく、お粗末なものだった。



ギムナジウムの生徒達と

2. フランス

3日間のチューリヒ滞在の後、11月14日（日）バスで2時間程かけて、次の訪問地ミュールーズへと向かう。緩やかな流れのライン川を渡り、山の中を歩いてミュールーズに着く頃には雨も上がり、快晴になっていた。午前11時アルターホテルに到着。日曜日のため、ほとんどの店は閉まっており、人通りも少ない。ホテルから見えるヨーロッパ独特の教会の尖塔が印象的だった。

(1) ミュールーズの概要

フランス東部、オラン県中南部の工業都市。アルザス平野の南部で、ローヌ・ライン運河沿岸に位置し高速道路や鉄道、空路の連結点、交通の要衝として発展してきた。人口11万人。古くから綿工業が盛んである。神聖ローマ帝国の一都市であった、別名ミュールハウゼン（ドイツ語で「風車の家」の意）は、1397年自由都市の宣言をしているが、それほど住民の自由と独立の気風は高かったといわれている。その独立を1798年、フランス共和国に統合されるまで保持することができた。

(2) 学校教育制度

フランスは、22の州からなり、教育行政区からみると、26の大学区に分けられる。大学区の下は、全国で96ある県で、その下はコミューンと呼ばれる市町村で36,538ある。教育関係の省は、日本のように一つではなく、教育省、大学省、青少年・スポーツ・余暇省の三つに分かれ、それぞれに大臣がいる。義務教育は、6才から16才までの10年間である。エコール（Ecole）と呼ばれる小学校は、5年間で、1年から5年まで全ての学年が、週27時間の授業を受ける。進級制度で特徴的なことは、全5学年を「準備期」（第1学年）「基礎期」（第2・3学年）、「中級期」（第4・5学年）の三段階の過程に編成し、課程修了主義をとっていることである。従って小学校でも原級留置がごく普通に行われており、教師や父母の原級留置に対する考え方には、日本とかなり違ったものがある。エコールを修了すると、コレージュと呼ばれる中学校へ進み、ここで4年間教育を受ける。フランスの学年は、リセ（高校）の3年生をターミナルと呼び、高校2年を1学年、高校1年を2学年というふうに日本とは逆の呼び方になっているのが特徴である。クラスサイズは平均24人で、必修授業時数は週24時間、補充時数が3時間（国語、数学、外国語）である。高校は、いわゆる普通のリセと、職業教育リセがあり、3年間そこで学ぶ。修了するためには、高校卒業資格と大学入学資格を認定する国家試験「バカロレア」を受けなければならない。国民教育視学官のレーズ・ベッカー女史によると、30年前はバカロレアの合格者は15%であったが、今は49%になっている。また、最近では、全ての子供がホワイトカラーでありたいと願い、手職人が少なくなっており、肉体労働は外国人に任せるといった傾向になってきているということだった。フランスの大学は私立大学はなく、86校、全て国立大学である。そして、授業料は無料で、年間登録料として、15,000円を払うだけでよい。

(3) 学校訪問

最初に訪問したのは、フランスでも1校しかないといわれるフランス語

| | | | | |
|------|-----------|--|-------|---------------|
| 1 | 学 校 名 | Robert-Koch-Realschule | | |
| | 所 在 地 | Stuttgart-Vaihingen | | |
| 訪問学校 | 創 立 | 1959 | | |
| | 校 長 名 | Mr. Binder | | |
| 2 | 校長を除く職員数 | 男 | 15名 | 女 24名 |
| | 事務職員数 | 4名 | | |
| | その他の職員数 | 2名 | | |
| | 週当たりの授業時数 | 14~27 単位時間 | | |
| | 一日の勤務時間数 | 7:45から19:15まで 時間/週 | | |
| 3 | 在 籍 数 | 男 | 238名 | 女 234名 計 472名 |
| | 学 年 数 | 6 | 学 級 数 | 18 |
| 4 | 年間授業日数 | 220日 | | |
| | 週間授業日数 | 5日 | | |
| | 週間授業時数 | 32時間 | | |
| | 年 間 行 事 等 | 開始 8月1日 終了 7月31日 休業期間 5回 合計 72日/年 主な年間行事 体育祭、文化祭 | | |
| 5 | 必修教科 | 数学、ドイツ語、英語、歴史、社会、地理、生物、化学、物理、体育、美術、道徳 | | |
| | 選択教科 | フランス語、技術・家庭科 | | |
| 6 | 普通教室数 | 18 | | |
| | 特別教室数 | 理科室、音楽室、家庭科室、視聴覚室、コンピューター室 | | |
| 7 | 選択責任者 | 市教育局 | | |
| | 検定の有無 | 有 | 無 | 無 |
| 8 | 教科書 | 有償・貸与・無償 | 有償 | 貸与 無償 その他 |
| | その他 | 男女共学の有無 | 有 | 無 |
| 9 | 学校給食の有無 | 有 | 無 | 無 |
| | PTAの有無 | 有 | 無 | 無 |
| | 職員組合の有無 | 有 | 無 | 無 |
| | 上級学校への進学率 | 65% | | |

図4. ドイツの学校の概要

週27時間の授業を受ける。進級制度で特徴的なことは、全5学年を「準備期」（第1学年）「基礎期」（第2・3学年）、「中級期」（第4・5学年）の三段階の過程に編成し、課程修了主義をとっていることである。従って小学校でも原級留置がごく普通に行われており、教師や父母の原級留置に対する考え方には、日本とかなり違ったものがある。エコールを修了すると、コレージュと呼ばれる中学校へ進み、ここで4年間教育を受ける。フランスの学年は、リセ（高校）の3年生をターミナルと呼び、高校2年を1学年、高校1年を2学年というふうに日本とは逆の呼び方になっているのが特徴である。クラスサイズは平均24人で、必修授業時数は週24時間、補充時数が3時間（国語、数学、外国語）である。高校は、いわゆる普通のリセと、職業教育リセがあり、3年間そこで学ぶ。修了するためには、高校卒業資格と大学入学資格を認定する国家試験「バカロレア」を受けなければならない。国民教育視学官のレーズ・ベッカー女史によると、30年前はバカロレアの合格者は15%であったが、今は49%になっている。また、最近では、全ての子供がホワイトカラーでありたいと願い、手職人が少なくなっており、肉体労働は外国人に任せるといった傾向になってきているということだった。フランスの大学は私立大学はなく、86校、全て国立大学である。そして、授業料は無料で、年間登録料として、15,000円を払うだけでよい。

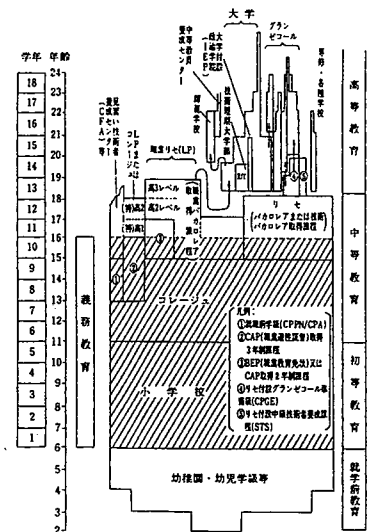
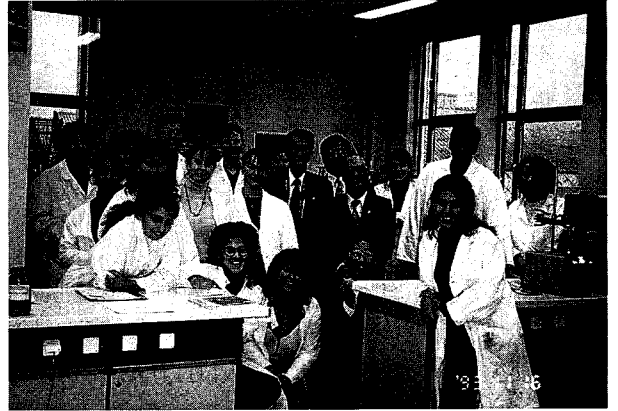


図5. フランスの学校系統図

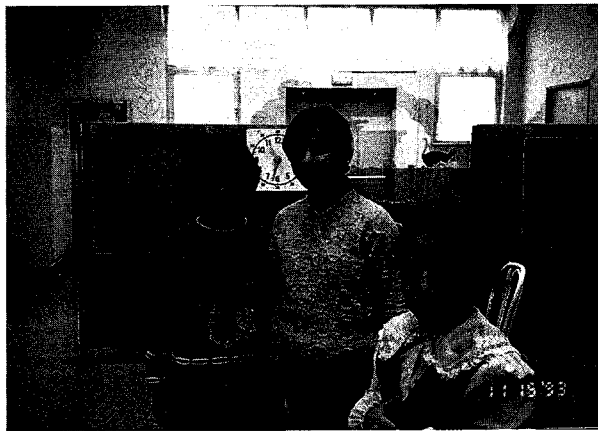
フランスの学校



テレーズ小学校にて



ラポアジェ高校にて



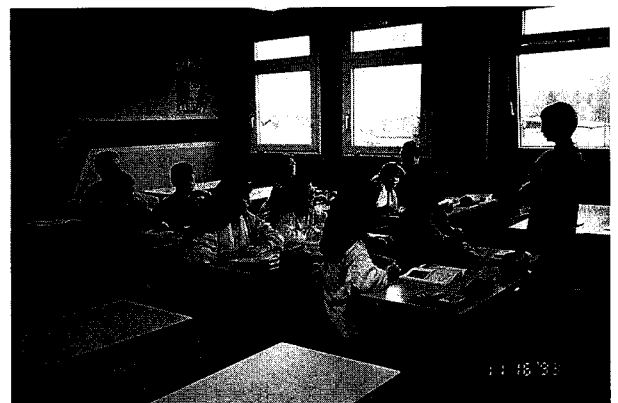
エスパ・アルファにて



ラポアジェ高校にて



ラポアジェ高校にて



エミール・ゾラ中学校にて

を話せない子供達のための学校Espace Alpha（エスパ・アルサ）である。両親が、移民労働者、避難民、企業の幹部などで、ここで2～3ヶ月勉強し、適応性を養ってから普通の中学校へ移る。7才から16才の色々な国から来た子供達が学んでおり、我々が参観を終わった後、ジュースやワイン、クーガロフ（パン）等を勧めてくれた。ここでの訪問が翌日の地元の新聞に載り、我々訪問団の話題の種となった。子ども達が帰るときに、覚えてたのフランス語で、「オ・ルポアール！」（さようなら）と言うと、笑顔と共に返事が返ってきた。



エミール・ゾラ中学校にて

次に訪問したのは、18クラス、約400人の児童がいるTherese（テレーズ）小学校である。11:40に午前中の授業が終わり、市の職員がきて、食事の世話をするので、教員は1:40から出るそうだ。職員室も休憩室みたいな感じで、物がほとんど置いてなかったのには驚いた。小学校1年の国語の授業を見たが、我々が教室にはいると、嬉しかったのか、クスクス笑いだし、それに対し先生は静かになるまで一言も口を開かなかった。その後も笑顔一つ見せずに、非常に厳しい感じがした。後で視学官にそのことを話したら、親に余り教育力がないので、学校で厳しくしつけをしなければならないとのことだった。

二日目の最初の訪問校は、Emile Zola中学校である。アメリカもそうだったが、フランスの学校名は、作家や科学者の名前からとったものが多い。ここも作家エミール・ゾラからとった学校だった。ここで驚いたのは、授業の前に生徒全員が校庭に出て、先生が生徒を引き連れて、教室の鍵を開けて入るということだった。さらに、壁やドアの色が原色を使ったなんともけばけばしいのには参った。中学2年生のドイツ語の授業を見たが、文法の教科書やテープレコーダーを使って、ここも先生は結構厳しく指導をしていた。生徒数12名程度で外国語の授業ができるのは羨ましい限りである。

フランス最後の訪問校は、科学者ラボアジェから名前をとったLavoisier高校である。この学校は、生徒数1130名で、そのうち職業教育を受けているのはわずか15名だけである。さらにこの学校には短大のようなものが併設されており、高校、短大合わせて5学年に渡っていた。短大2年生の化学の実験を参観したが、こちらの質問に流暢な英語で一生涯懸命答えてくれた。バカロレアは、6月下旬から7月にかけて、4日間、筆記及び、口頭で試験が行われる。大学区ごとに一律の試験で、受かった場合は、希望の大学に入れる。ただ、最近はパリの大学に希望が集中し、必ずしも第一希望の大学に入れないという。

3. アメリカ

11月19日、3日間のパリ滞在後、アメリカン航空でシカゴに飛ぶはずだったが、アメリカン航空がストのため、急きょデルタ航空でシンシナティまで飛び、そこからシカゴへと向かった。おかげで、シカゴからロスにアメリカン航空、ロスから成田はユナイテッド航空だったので、アメリカの三大航空会社の飛行機に乗ることができた。シカゴの町は、別名Windy Cityと言われるぐらい風が強く、寒さが厳しい。また、この町はここ600年間地震に見舞われたことがなく、世界一高い建物であるシアーズ・タワーを始めとして、高層ビルが林立している。二日間の滞在中、ノーベル賞受賞者を40数名出し

| | | | | |
|----|-----------|------------------------------------|-------|------------|
| 1 | 学 校 名 | College Emile Zola | | |
| | 所 在 地 | 30 rue de Pfaltz 68260 Kingersheim | | |
| | 創 立 | 1974 | | |
| 2 | 校 長 名 | Monsieur Roos Alan | | |
| | 校長を除く職員数 | 男 | 22名 | 女 25名 |
| | 事務職員数 | 2名 | | |
| 3 | その他の職員数 | 8名 | | |
| | 週当たりの授業時数 | 18~20 単位時間 | | |
| | 一日の勤務時間数 | 8:00から17:30まで 時間/週 | | |
| 4 | 在 籍 数 | 男 | 名 | 女 名 計 672名 |
| | 学 年 数 | 4 | 学 級 数 | 27 |
| | 年間授業日数 | 360 半日 | | |
| 5 | 週間授業日数 | 10 半日 | | |
| | 週間授業時数 | 25~31 時間 | | |
| | 年 度 行 事 毎 | 開始 | 9月7日 | 終了 7月5日 |
| 6 | 休業期間 | 5回 合計 213日/年 | | |
| | 主な年間行事 | 臨海学校、林間学校 | | |
| | 必修教科 | 10科目 | | |
| 7 | 選択教科 | 2科目 | | |
| | 普通教室数 | 19 | | |
| | 特別教室数 | 理科室3、音楽室、美術室、技術室4 | | |
| 8 | 選択責任者 | 教師 | | |
| | 検定の有無 | 有 | 無 | |
| | 有償・貸与・無償 | 有償 | 貸与 | 無償 その他 |
| 9 | 男女共学の有 | 有 | 無 | |
| | 学校給食の有 | 有 | 無 | |
| | PTAの有無 | 有 | 無 | |
| 10 | 職員組合の有 | 有 | 無 | |
| | 上級学校への進学率 | 96% | | |

図6. フランスの学校の概要

ているシカゴ大学、人体の輪切りが展示してあるシカゴ博物館等を訪問した。その後、バスで約3時間かけて、最後の学校訪問地、ミルウォーキーへと向かった。

(1) ミルウォーキーの概要

アメリカ中北部、ウイスコンシン州南東部の商工業都市、またミシガン湖西岸に臨む湖港でもある。人口63万人。シカゴとともにミシガン湖沿いに発達した新しい工業地帯の中心都市の一つで、近隣の主要都市を結ぶ交通の要衝である。五大湖の主要湖港で水運が発達し、穀物の積出港として100年以上の歴史を持つ。市人口の約70%以上がドイツ系の住民である。また、1840年に始まるビールの生産で名高く、国民に人気のあるパブスト、ミラー、バドワイザーなどのビール工場がある。

(2) 学校教育制度

教育の地方分権制がとられているアメリカでは、学校制度も地域によって、かなり異なっており、全国共通の制度は存在しない。初等、中等学校をどのように編成するかは、多くの場合、地方教育行政機関(学区)が決定すべき事項とされている。現在多くの地域で採用されている制度は6・3・3年制、6・2・4年制、8・4年制、及び6・6年制である。このほか、5・3・4年制や4・4・4年制などが一部で行われている。我々が訪問したMilwaukee Public Schoolsでは5・3・4年制で実施されていた。最近の傾向としては、伝統的な制度に代わって、5・3・4年制や4・4・4年制などをとる、いわゆる「ミドル・スクール」が徐々に増加しつつあるとのことだった。義務教育年限は、9年とする州が多いが、6年から12年まで、州によって異なっている。我々が訪問したウイスコンシン州は4才から16才までの13年間であった。幼稚園4才～5才の2年間、小学校6才～10才の5年間、中学校は3年間(11才～13才)、高等学校は4年間(14才～17才)である。このことからすると義務教育は高等学校の3学年で終了することになるが、実質上は卒業まで面倒を見ている状況にある。学年は通常7月1日(実際は8月26日)に始まり、6月30日(実際は6月9日)に終わる。また高校は原則として「総合制」であり、進学、普通、及び職業課程が設けられ、コース制がとられている。

(3) 学 校 訪 問

アメリカ最初の訪問校は、全校生徒の87%がヒスパニック系(メキシコ人、プエルトリコ人等)だといわれるAlbert E. Kagel(彼は1926年、当時23才で当校の校長になったと言われる)小学校である。そのために、隔日で英語、スペイン語の授業を行うという特殊な方式(バイリンガルプログラム)を採用している。校長のMs. Rose Guajardoは、この地区では初めてのヒスパニック系の校長先生であり、若い女性教頭と年輩のこれまた女性教務主任と、この学校の3役はすべて女性であった。給食は完全実施されているが、1日1ドルの給食費の補助を受けている家庭が70%に達するという。このように貧しい地域の小学校であったが、子どもたちの表情は明るく、生き生きとした。我々も、子どもたちと一緒に、セルフサービスで、子どもたちと同じ給食を頂いた。学年毎に時間差を設けて、行儀よく食べていた。

次の訪問校は 生徒数約1000名、この地域では平均的な中学校と言われるFretsche Middle Schoolである。校内に入ると、麻薬や暴力の禁止を訴えるポスターがあちこちに貼ってあったり、トランシーバーを持った警備員兼生徒指導員が歩いているのが目に入った。しかし、生徒たちはとても人なつこく、カメラを向けるとお

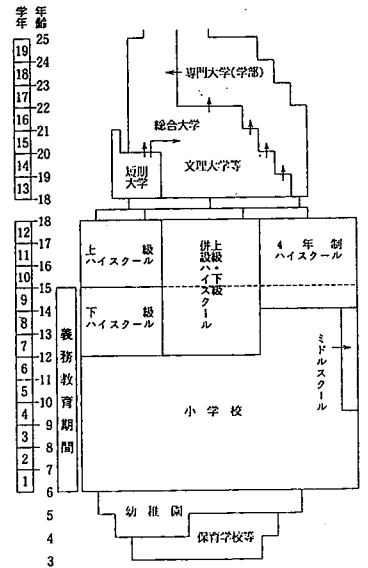


図7. アメリカ合衆国の学校系統図



フリッチェ中学校にて

どけたポーズを取ったりしてくれ、明るい感じがした。授業参観では、体育の授業のようだったが、生徒たちは、私服のままで、中にはポシュエットを肩にバスケットをしていたのには驚いた。校長先生によれば、ミルウオーキーには決められた通学区がないため（学校選択は原則的には自由）、各学校で独自の魅力的な教育プログラムを組む必要があるとのことだった。この学校では、教師たちがグループを作り、それぞれが子どもにあったカリキュラムを作って、それで指導するという「ファミリー制」を取っていた。



ケーゲル小学校にて

翌日の訪問校は、多様な障害を持った生徒と一般の生徒が通学する学校で、約33%の生徒が何らかの障害を持っているGaenslen小学校である。小学校といっても年齢は3才から15才までの生徒が通っており、健全な生徒と障害を持った生徒と一緒に学習する機会も多いということであった。大柄な女性校長Bonnie Vick女史からは、創立当時は、学習のプログラムも違っていて、教師の理解も十分でなく、父母の理解もなかなか得られず、容易ではなかったが、今は教育に関する理解も得られ、父母の反応もよいとのことだった。校長先生の話の後、じっとそこで待っていた6人のボランティアの生徒達に案内されて校内を見てまわったが、教室のしきりはアコーディオンカーテンで、オープンスペースになっていたり、障害者のための設備がかなり整っていることが伺われた。設備の面だけでなく、素直で、澄んだ瞳のこども達を見ていると、障害者と共に生活することによって、多くのことを学んでいるように思われた。次に校長先生の教育哲学を紹介したい。

Schools are not in business to fail children ! Our only reason for existence is to help each child be as successful as he or she is capable of being.

「学校は、子供を切り捨てる仕事をするところではない。我々が存在する唯一の理由は、彼や彼女達が、しっかり生き抜けるように、それぞれの子供達に援助の手を差し伸べることにある。

from the principal



ケーゲル小学校にて

午後1時、最後の訪問校ミルウオーキー芸術高校に着く。ミルウオーキー全域を校区とするミルウオーキー唯一の芸術高校である。美術、音楽、ダンス、演劇の4つのコースを持っており、卒業後は65%が大学進学であるが、ここでの勉強を生かして、その道の大学に進む生徒はわずか20%しかいない。この学校の教育目標は、芸術を通して人間形成をすることにあるとのことだった。教頭先生の案内で、各教室を見せて頂いた。ダンスの授業の後、12学年の女生徒が我々のために、すばらしいダンスを披露してくれた。「ダンス関係の大学に進む希望か。」と聞くと、「今はまだ考えていない。」とのことだった。次に演劇コースの授業を見たが、生徒達は顔に赤や青のペイントで楽しそうにメイクアップの練習をしていた。次に案内されたのが、なんと校内にある854人収容の劇場であった。ここで生徒達が勉強した成果を発表したり、専門の演奏家が来て演奏するそうである。3時頃視察を終えて玄関に出ようとしたら、そこに3、4人の女生徒が座っているので、話しかけると、9学年の生徒だということで「今親の迎えの車を待っている」という返事が返ってきた。通学範囲が広いので、通学するのも大変のようである。翌日の感謝祭に招待してくれたシャロンさんの娘さん（サマンサ）もこの学校に通っているとのことだった。

IV. お わ り に

今回の海外視察研修は、私にとって、25日間もの長い旅であり、当初健康面のことが一番心配であったが、きわめ

て順調に、そして、楽しく当初の目的を達成することができた。この研修で感じたことを2、3述べたいと思う。

まず、ドイツでは、近隣諸国との経済的、政治的なつながりが強いので、外国語教育に非常に力を入れており、ギムナジウムでは、第2、第3外国語まで学習していた。このことはフランスでも同様であり、小学校5年生ぐらいから外国語学習をスタートしていた。日本も、研究開発校では小学校で英語の授業を取り入れているが、国際理解教育を進める上では、外国語学習のスタートを小学校におろしてもよい時期にきているのではないだろうか。また、ドイツ最初の訪問校 Robert Koch Realschuleを訪ねたとき廊下やホールがとても薄暗かったが、こういう所にも不必要な電気は使わないというドイツ人の合理的な面が現れていることを実感した。ドイツでは、街の景観をととても大切にしており、広告は円柱の形をした広告塔にしか張ることはできないし、電柱も見ることがなかった。街の様子に関しては、アメリカはどちらかと言えば、道路が広いことを除けば、日本と似たような建物が多かったが、ヨーロッパの建物は独特の雰囲気を出していた。

フランスでは、企業人から移住民、避難民の子弟まで、実に様々な外国人の子どもたちが大変多い。フランス語を話せない子どものための学校まで設置して、早く学校生活に適応するよう指導がなされており、またテレーズ小学校では、月曜日の午後は母国語教師による各国語の授業がなされていた。日本でも、外国人労働者の子弟の教育をどうするか問題になっているところもあり、今後益々増えていく外国人の子弟に対する教育をどう行っていくかの対応が期待されることになるだろう。また、フランスでは、女性の社会進出や女性の地位の向上が、早くから確立しており、教育の場でも校長や指導主事としてたくさんの女性が活躍していた。授業を見た感じとしては、ネックレスやイヤリングをしていた生徒もおり、服装に関しては結構生徒の個性を尊重しているように思えたが、授業の規律という面では非常に厳しい態度で接しておられた。

アメリカでも女性の校長や指導主事が大変多かったが、これは西洋では、教育は女性の仕事という昔からの伝統があり、男性が教育の仕事に就くのを敬遠しているとのことだった。アメリカの教育では、外国語教育については、多民族国家であるので、もちろんせざるを得ないわけだが、それ以外に特に数学教育に力を入れていた。調査によると、数学ができる生徒は、大学進学、卒業に有利で、大学で成功するかどうかの鍵になっているようだ。また、我々が訪問した中学校では、生徒の70%がマイノリティ（白人以外）で、家庭の仕事に追われる子どもや勉強できる状況にない子どもが多く、登校拒否の生徒も1%程度いるとのことだった。複雑な家庭環境を持った生徒たちを抱えて、基礎学力をつけるために教師たちは懸命に努力をしていた。その姿に接し、改めて我々も子どもたちのためにがんばらなければ、という思いを強くした。アメリカでは、団長さんの決断によって、当初計画になかった家庭での感謝祭も経験させて頂き、アメリカの家庭の雰囲気的一端を知ることができ、英語の教員としては大変嬉しかった。

最後に、大変貴重な体験をさせて頂いた文部省や島根大学関係者各位、ならびに本校やお世話頂いた多くの方々に深く感謝し、お礼を申し上げます。

(ひらの けんじ・英語科)

| | | | | |
|-----------|-------------|------------------------------------|--------|----------|
| 1 | 学 校 名 | Fritsche Middle School | | |
| | 所 在 地 | 2969 South Howell Avenue Milwaukee | | |
| 訪 問 学 校 | 創 立 | | | |
| | 校 長 名 | Mr. William Andrekopoulos | | |
| 2 | 校長を除く職員数 | 男 | 28名 | 女 46名 |
| | 事務職員数 | 6名 | | |
| | その他の職員数 | 12名 | | |
| | 週当たりの授業時数 | 30単位時間 | | |
| | 一日勤務時間数 | 7:45から3:18まで 時間/週 | | |
| 3 | 在 籍 数 | 男 512名 | 女 480名 | 計 992名 |
| | 学 年 数 | 3 | 学 級 数 | |
| 4 | 年間授業日数 | 180日 | | |
| | 週間授業日数 | 5日 | | |
| | 週間授業時数 | 40時間 | | |
| | 年 間 開 始・終 了 | 開始 8月31日 終了 6月11日 | | |
| | 休 業 期 間 | 24日 合計 日/年 | | |
| | 主な年間行事 | スポーツ大会、風人の歴史月間、マーケティング | | |
| 5 | 必 修 教 科 | 5教科 | | |
| | 選 択 教 科 | 2教科(家庭科、スペイン語、音楽、美術) | | |
| 6 | 普通教室数 | 33 | | |
| | 特別教室数 | 11 | | |
| 7 | 選 択 責 任 者 | 教師 | | |
| | 検定の有無 | 有 | 無 | |
| | 有償・貸与・無償 | 有償 | 貸与 | (無償) その他 |
| | 8 | 男女共学の無 | (有) | 無 |
| 学校給食の有 | | (有) | 無 | |
| PTAの有無 | | (有) | 無 | |
| 職員組合の有 | | (有) | 無 | |
| 上級学校への進学率 | | 65% | | |

図8. アメリカの学校の概要



感謝祭 (シャロンさん宅にて)